

Title	如儼子とその作品：「可笑記」：その一
Sub Title	Nyoraishi and Kashoki (1)
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1969
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.27, (1969. 3) ,p.262- 280
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国語国文学・中国語中国文学特集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00270001-0262">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00270001-0262</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 如儼子とその作品

—「可笑記」— その一

関 場 武

一 は じ め に

寛文二壬寅年初陽吉祥日 柳馬場二条下ル町 吉野屋権兵衛刊行、越後の人曾我休自あらわすところの仮名草子、「為愚痴物語」<sup>1</sup> 卷之八 三十三ウ・三十四オに

「やうしとも見るところ」

と説明書きのある、見開きの挿絵がある。卷之八のその第七図・第八図には、男女あわせて十人ほどの者が、吹抜屋台の一室にて、何やら書物を繕っている様が描かれており、いくばくかの書籍が積み上げられているのがみとめられる。……ここで問題にするのは、その積み重ねられた書冊の表紙(左肩に見える文字、「書名」)である。

すなわち、第八図の左方から

「いくち八」

「かんにんぎ」



為愚痴物語卷之八 第七図・第八図

「いんくは物□□」

「かせうき」

と、各々題簽に記されているそれである。自家宣伝的な「いんくち」は別として、「かんにんぎ」はおそらく了意のそれを、「いんくは物語」は鈴木正三の、「かせうき」は今こゝでこれから考察を加えようとしている如備子のそれを、各々指しているものと推定しても、大過はないであろう。

言うまでもなく、「堪忍記」・「因果物語」・「可笑記」そして「為愚痴物語」は、了意・正三・如備子・休自にとつての代表作であり、文学史等においていわゆる仮名草子の中の代表作に数えられてきたものであった。こゝにたまたまその書名が刻されているのは、あるいは画工等の単なる手すさび・いたずらにすぎぬものかもしれない。が、それが誰の手によるものであれ、そこにこうして四部の書の書名を彫りつけたということには、恣意・偶然、遊び・戯れと言うよりも、むしろ何らかの撰択意識を感じとるべきではあるまいか……。やゝ時代は下るが、梅蘭堂都の錦は言う。

此外めやすき草紙には。大和物語。宇治拾遺。清輔が雑談。今はむかしの物語。よしの拾遺。雑と拾遺。著聞集。十訓抄。晝筆記。など有といへど。此等にいへる言の葉は。久しく目馴聞ふれて。めづらしからねばとて。如傀儡はじめて可笑記を作り。昭儀坊亦御伽婢子をあらはし。

(御前於伽 六 △総論 むかしはむかし今は今 文章に時所位ある事)

参咄の本におもしろきはいつれにて候や 京およそはなし・物かたりの類、その数無量なりといへども。一年半の間にうつりかはり。きのふめづらしかりしもけふははやくさめ。一篇みたる草紙は二度見られぬやうになりぬ。むかしより今にいたりてみざめせずしておもしろき物は。御伽婢子。可笑記。意思智物語なるべし。又近年板行ありしには。宗祇諸国物語。武道伝来。御前於伽、此等は万代不易の書なり

(元禄大平記 六 ○皆歴きの作者なりけり)

と。さらに「異説まち／＼」の著者、烏江和田正路は述べる。

一 いくち物語 醒醉笑 可笑記

質なるもの也。此時迄はありたる咄を書たるなり。夫ゆへ事実の助となる事有り。今はわざ／＼おどけ咄を思ひ付にて拵えて咄す也。(卷之一ノ一〇)<sup>4</sup>

と。……こゝでもまた「可笑記」は、「為愚痴物語」と共に挙げられている。

ところでまた、この「為愚痴物語」の挿絵の画家は、その三年前、万治二年正月吉日 山本五兵衛板行の「可笑記」の挿絵をも描いているのである。<sup>5</sup>とすると、前述「為愚痴物語」卷之八の第八図に見られる「かせうき」の名は、あるいは単に、自身がかつてその挿絵を描いたことのあるものに対しての、郷愁・追懐の念といったようなものにより、浮び出てきたものかもしれない。が、しかし、斯くならべてみると、その四つの書名は、やはり仮名草子中の代表的存在としての意味あいのもとに、おそらく掲げられたものではあるまいかと、思われてくるのである。

## 二 諸本について

さて、寛文十戌<sup>庚</sup>季秋吉旦、江戸・京都両都の書肆西村から板行された「補書籍目録作者付」大憲「仮名和書の部に

五可笑記 大小 如偏子作

と刻されて以来、如偏子<sup>6</sup>という号をもつ何者かの述作と言われてきている。「可笑記」には、版式から言って、周知の如く、少なくともそれ自身

A. 寛永壬午季秋吉旦刊行 十一行本

の初版本をはじめとして

B. 右同一刊記 Aの変則的覆刻 十二行本

C. 無刊記十二行本

D. 万治二年正月吉日刊 絵入本

の四種があり、万治三年<sup>庚子</sup>二月吉祥日刊の瓢水子浅井松雲了意筆「可笑記評判」所載の「可笑記」本文が、現存本ではC本のそれをもとにすることもすでに指摘されているが、<sup>7</sup> これまた度々言及されているごとく、「可笑記」は、それ自身に版を重ねたばかりではなく、以後の多くの作に影響を与えたのであった。その相互の内容的検討はしばらくおくとして、題名だけをとってみても

可笑記評判 (万治三年刊)

をはじめとして

可笑記跡追 (寛文十二<sup>壬子</sup>正月吉日 書林堂山本七郎兵衛・小川井兵衛板行)<sup>9</sup>

新可笑記 (元禄元年刊)

一休可笑記 (宝永二年刊)

後前可笑記 (宝永五年以降刊)

続可笑記 (宝暦七年 書肆定栄堂 大坂 吉文字屋市兵衛・同源十郎・江戸 同治郎兵衛刊。「浮世物語」改題本)<sup>10</sup>  
といった仮名草子・浮世草子等があげられる。

近世戯作の起原は、この『可笑記』にはじまる由を、つらねし言葉なり。(中略)たとへ『可笑記』以前に、戯作ありきとするも、みな等閑に附せられ、ひとり『可笑記』を歓迎するの声は、戯作の導火線に着火せしものに異ならず。<sup>11</sup>

さきに引用した都の錦の詞の意をとって、水谷不倒氏がかく言われたのも、まことにむべなるかなである。以下、その「可笑記」を中心として如備子などについて、いさゝかの小考を加えてゆくことにする。<sup>12</sup>

註1 大本 八卷八冊。

2 大本 六卷六冊。元禄十五年刊。六の十四オ・ウ。

3 大本 八卷八冊。元禄十五年刊。六の十オ・ウ。

4 日本随筆大成卷九所収本による。卷之三末に寛延元年戊辰八月の奥書あり。当該項目は続日本随筆索引により検索。なお附言すれば、和田烏江は、同書の他の巻にも「可笑記」の名を出している。すなわち卷之二ノ一九、「六七十年前までは、ひたもの喧嘩も有しなり。夫故敵討も多し。……」という条の終りの方に

また古人歌舞妓狂言見けるに、親の敵に出合けるに、向やらん無<sub>レ</sub>據<sub>レ</sub>ことにて、其場をのがす事有。後來を期す事有しに、右の古人、親の敵に出合、後を期す事有べからず。此狂言おもしろからずとて、つゝ立て帰りけるとかや。今時の狂言は、敵討がすめば狂言しまふてしまふ故に、かれのこれのと敵討延すを、おもしろきといふなり。可笑記にいふ如く、親の敵に出合たらば、大小は勿論、若有合ずば小刀にても、楊枝にても、若無手ならば喰付て成とも、鱈を報ぜよと有り。此風の古人までしたはしくこそ。

と、「可笑記」卷第二ノ二四の一部をひき、さらに同書卷之三ノ二八では

一 厭路の鈴といふ道中記を書たる本有。近古城地の事実などありて古風なるもの也。却て古き故実は、誤伝へることくに記したる所もあり。宝永年中の板なれども、編める所は天和、貞享の比の編なり。作れる人は質なる事にて、可笑記などの主意有て、おどけ事は醒醉笑のごときなり。寛永年間を生れ人と見ゆる也。

と、大曾根左兵衛の「東海道厭路の鈴」(五卷。宝永六年刊。)の説明に、「可笑記」をかつき出ししている。

寛文の頃迄の記録は、その家々の家士浪人などの書たるものゆへ、片ひみき成よふには見ゆれ共、諸家の書を集めみれば、自ら分るぞかし。皆々質なるものにして、今世連続したる記録の、そばはづかしきにはあらず。古き記録には誤りも多し。其誤りあるが実録なり。其所々々で、その時聞し儘、言伝しまゝを記す故也。(卷之一ノ二)

甲陽軍鑑誤り多しといへど、質にして事実多し。(同 六)

都て寛文より以前の書は、記録、物語類、雑書共化物はなし、作り物の本までも質にして、其時代の風俗なぞ見えて、忍しく思はる。(同 一一)

5 斯くならべて見れば、彼の言う「質なるもの也」の意についての贅言は要さないであろう。

水谷不倒氏「古版小説挿畫史」を参照。この画家は水谷氏のいわゆる「他我身之上の画系」に属するもので、仮名草子では他

に、万治二年版の「身の鏡」や「伊曾保物語」等の挿絵を描いている。なお同書には、万治版「可笑記」の巻第三の第八図や、こゝに取り上げた「為愚痴物語」巻之八のその挿絵が、図版として載せられている。

6 「じよらいし」と訓んでいる書が多いようであるが、寛文四年五月刊の問題の書「百八町記」巻第五の後序に

せうきよぶのとしあひめのももの  
承応四年秋始下日 如儻子これを躑躅にす

とあるので、「じよらいし」なる訓みに従うべきかと思われる。

7 「可笑記」の諸本については、最近(昭和四十三年六月)、深沢秋男氏が、日本近世文学会春季大会に於て口頭発表をされた由である。氏は以前から法政大学の「文学研究」を舞台に、「可笑記」に関する精緻なる御論考を発表されて来られ、諸本についても各地をまわって御調査を進められておられるとのことである。深沢氏の御成果の誌上御発表を待ちのぞむ次第。

8 前田金五郎氏「浮世物語」雑考(国語国文 昭和四十年六月)

9 某氏御所蔵。本書については近く別に発表される予定である。

10 京都府立図書館(現京都府立総合資料館)所蔵の万治二年版可笑記には、巻第五の後表紙見返しに、「定栄堂蔵版目録」、すなわち大坂書林 吉文字屋市兵衛・同源十郎の刊行書目が附せられている。深沢秋男氏は「可笑記の読者」(文学研究 第二十六号)の研究余滴(昭和四十二年十二月)で、その中に「西鶴織留」や「西鶴置土産」の名が見られるところから、この「可笑記」の刷りたてられた時期を、万治二年より三十年後の西鶴没年前後と推定されたが、これはもう少し引き下げて考えるべきものであると思われる。例えばこの「西鶴織留」は、元禄七年三月刊の初刻本を指すものではなく、いわゆる享保版のそれである。同書の巻六後表紙見返しには、「廣大節用集 享保十五年新版」と年次の明記されている一書の名を含む「板本心斎橋筋 吉文字屋市兵衛」の出版書目が貼付されている。またこの「可笑記」に附せられた蔵板目録の第一番にあげられている「古今百物語」は、「拾遺御伽婢子」(宝永元年正月刊)の改題本たる、宝暦元年正月 大坂 吉文字屋市兵衛・同源十郎・江戸 同次良兵衛刊のそれをさすものであろう。そこでこの「可笑記」を、仮に宝暦初年頃の求板本とすれば、万治二年より約九十年後のものとなり、またその同じ吉文字屋が「可笑記」の小説化とも言われている「浮世物語」を宝暦七年に「続可笑記」と改題した意図の、奈辺に存するかも、かなり明白になってくると思われる。

11 「近世列傳體小説史」(明治三十五年五月 春陽堂)上巻による。



ところで例えは

『御伽百物語』に本書を激賞して近世戯作の祖と記せり

などという記述が

「新修日本小説年表」(朝倉無聲 大正十五年 春陽堂)

「近世文藝志」(笹川種郎 昭和六年 明治書院)

「大人名事典」(昭和二十八年 平凡社)

等に散見されるが、黄表紙の「御伽百物語」(安永五年刊 鳥居清経画)は勿論のこと、白梅園青木鷺水の「御伽百物語」(宝永三年刊)にも、そのような記事は見出せない。おそらくこれは、この春陽堂版の「近世列傳體小説史」十八頁に於て、せっかく「御前於伽」の本文を引きながら

右は都の鋪が『お伽百物語』の総論のうちにありて、近世戯曲の起原は……と誤ってしまったことに起因するものと思われる。

なお些細なことをもうひとつ言えば、「可笑記」の翻刻文が収載されている「近日本文学大系」第一巻・仮名草子集の巻頭に、「可笑記」挿絵として口絵写真が一葉おさめられているが、これは金平本のものであって、万治版の「可笑記」のものではない。すなわち第二巻・舞の本及古浄瑠璃集の

古浄瑠璃「公平天狗問答」挿絵

とあるものと、入れちがってしまっているのである。第二巻のそこに載せられているのが、万治版「可笑記」巻第一の第四図なのである。今日まで見ることをえた「近日本文学大系」第一巻・第二巻の数本が、当該箇所を皆入れちがえているようなので、申し添えておく。

引用本文は、いわゆる原本・翻刻活字本のいずれを問わず、用字等に於てできるだけその原型の面目を保つべくつとめたが、仮名文字は勿論、漢字も、概ね通行の文字に改めた。活版本をのぞく原本引用文の句点「、」や、改行・段落それに各話の整理番号は、筆者が私に加えたものである。なお特にことわりのないかぎり、「可笑記」本文の引用は、A本、すなわち寛永十九年刊十一行本を使用し、赤木文庫本等数本を参照している。原本披見に際し御高配を賜った阿部隆一・太田臨一郎・大西

寛・川瀬一馬・堀田信夫・前田金五郎・横山愛子・横山重の各氏、および公私の各図書館・文庫に、深謝申し上げます。また写真撮影に多大の御援助を下さいました山里石峰氏にも、深甚の謝意を表す次第です。

### 三 可笑記という題号と窄人如偏子

笑ふにふたつ有、人は虚実の入物、明くれ世間の慰み草を集めて詠めし中に、むかし淀の川水を硯に移して、人の見るために道理を書つゝけ、是を可笑記として残されし、誰かわらふへき物にはあらず……

難波俳林西鶴（西鶴）は、元禄元戊辰<sup>戊辰</sup>十一月吉日 江戸萬屋清兵衛・大坂岡田三郎右衛門板行の「新可笑記」の序で、かく語った。

（同じ哂をきゝ倦て立つ）

喪の伽に可笑記手にも取ぬ筈

（江戸みやげ<sup>1</sup>）

それが面白おかしかったか、あきあきするものであったか、めん妖なものであったか、

是ぞ可笑記のをはり成ける

「可笑記」初版本（A本）巻第五の最終話末に、如偏子はこう記した。此段に対して了意は語る。

評曰、誰とはしらず可笑記の石づきとなる笑種を仰出さるゝ、（中略）此故事に弁をつけて、おもしろくつくりたる物語也、実ある事にはあらずとみえたり

（可笑評評判 巻第十・第四十七 或大名のこと葉の事）

と。

ともあれ、

可笑記。

可笑記。

瓢水子松雲了意も「為愚痴物語」のあの挿絵の画家も、都の錦も、天和元年季春 江戸日本橋南一町目左内町 山田喜兵衛開板の「書籍目録大全」も、元禄九年の「増書籍目録大全」も、そして、いろは仮名分書目の嚆矢たる延宝三年仲夏 江城下之書林輯刊の「新増書籍目録」の「か仮名」の部に「可笑記」の名が見えているからおそらくそれも、こう呼んだ。「かせうき」・「かしやうき」と、こうよんでいた。その書名について、如儡子と同一人物説さえ提案されたことのある了意は、「可笑記評判」巻第一において、次の如くに評判している。

この書の名を可笑記といふ事は、みづから卑下のこと葉なりや、白楽天が達人はわれを笑ふべし不達はまたいかんといふ語をとりて、達人はさだめてこの書を見てわらふべきことを、兼て卑下をいたしけりとみえたり、をよそ此書のおこるところ、上には天下国家をおさむべき事、王公大夫の身のおこなひ、下には村里茅屋をととのふる事、田夫野叟の世にすむべきありさま、ひろく文武兩道のおきてを、仮名がきにして、よみやすくしりやすきやうにひろめ。をしへんと心ざして。つくれる書とおぼえたり、達人いかでかこれをわらはんや、かゝる心ざしある書記の名に、卑下の字をくはふるは、これその実義に徴せざる故なるべし、異国はしらす本朝に、仮名がきの書おほくある、その作者の心に徴してあらはしたるに、卑下の字を名につけたるはなし、あるひは根本世鏡抄又は女訓抄なんどゝて、人の身もち・心のふるまひををしへたる書物、さらに卑下の字をかざす、近代みな新作する書にをかしき題号あるものおほし、凡みなこれ、よき人のみん事をおそれ恥かしむ心なれば、よくその理に徴せざる事明らか也

了意はこう言つてたしなめている。すなわち「可笑記」・「可笑記」は、卑下・自嘲の意での「可笑記」なりと、解されているわけである。だがそれは、物の本を綴る者達にしばしば見られるある種の自嘲・謙遜・韜晦のみに起因するものであつたらうか。

後みん人のわらひの種なれば、号て太笑記とやせん、されとも、道すから人々のかたりし事をそのまゝしるせば、筆語のあやまりをはゆるさるへくやあらん

于時慶長庚戌小春下辭記之 三浦長門守平為春

たしかに、同じ、人に笑われるべき記であつても、おなじ謙遜・へりくだりの意からつけられた題号であつても、そこに余裕といつた

ようなものゝ感じられる「太笑記」とはちがって、「可笑記」には、すでにその書名自体に、ある種の強い熱氣・悲憤のわだかまりが感ぜられるのである。……思うに如備子は窄人であった。そしてやはりひとりりの隠士でもあったのである。

水谷氏以来、しばしば引用されるところであるが、「可笑記」中に次の様な一節がある。

▲むかしさる時、親子ともに窄人いたし、越路のかたはらに徘徊仕り候時、あまりの事に父にをくれ、老たる母にやしなはれて、雪苦霜辛をしのぎおくりけるが、身のいとなみにかゝつらへ、武州江城の波にひかれ、やう／＼うかひ出候へども、大ずりきりなれば、ながく身上かせくべきてたてもなく、生国あづま者なれば、口才発にもあらず、心かたくなれば、世間せはくして、つてをもたず、生れつき愚なれば、芸能をもしらず、結句の花ぬりにぶ男さたのかぎりにして、いかゝすべきと思ひわづらへる処に、さるじひ人来て云るは、汝少ねじり書をもするなれば、当座の命つなぎに右筆せよ、にあはしき所あるべしと申さる、是は何よりもつてかたじけなし、とは申ながら、悪筆はよかる所なく人の右筆せんも、いかゝ候はん、又しもならはぬ事、思慮有べき事かといへば、かの人重てたゞいんきよすべしと申さる、答て、世上のならはし、知行・金銀・家をも持ての上、年打よりてこそ、隠居はすべし事なれと申ければ、かの人曰、いや／＼、我云所の隠居といふは、もろこし賢者の隠居也、それ賢者のいんきよといふは、萬世をわたるいと名み、わが身に一つも益なき事とさとり知て、おく山ふかく隠居して、大國大官をあたふれども、二度世に出ぬもあり、又我を善人と見知もちゆる人なきゆへに、ちりあくたの世間にまじはり、けからはしきをいやりむさがりて、見知きよおよび用る人有までもと、しばらく海辺などに隠居するもあり、又天下みだれさはがしくて、山陰海辺も山賊海賊の不道発向し、すみうき時には、城下の町に出て、あきなひ・さいくをして、命をつなぐ隠居もあり、又世間すいびして、あきなひ職も成がたき時は、門番をいたし、或は茶をも引、或は少の代官なども仕り、其一役に命をくくる隠居もあり、真其ごとく、其方も、右筆一いろに身をかくし、命をまつたくして、心ざしをとぐへき、と申さる (巻五ノ八八)

やゝ長文になるが、次も彼の境遇をかいまみせてくれるところである。

▲むかしさる人、さる時こつぜんと来りて、それがしに對し異見をいふ、汝いかにとして侍の道にそむくや、身躰みにくくおかし  
さよと、あざわらふ、それがしの存分には、やらきよくもなや、いけんならばしみくくとこそ有べけれ、是はひとへに我をあざけ  
ると、はらがたち候へ共、よし／＼、あのやうなる人非人めにむかつて腹立らんは、我も同じ人非人たるへしと思ひ、とかくがて  
んのいくやうに云きかせはやと存、答て曰、そのはうの御異見、めつらしからぬ事なれ共、今の身上におゐて、一しほかたしけな  
く覺て候、去ながら、我何をもつてか侍の道にそむくや、げらうの詞に、わが身のくさく知事なし、三度かへりみる身にしもあら  
ず、其悪いかん、ととふ、此人答て、されは今其方のすがたをみるに、がつさうあたまにやつし、刀・わきざしをもささず、ぶら  
り／＼とさまよひありく事、又其方宿のていしゆ、いかに富榮の者なり共、町人に対し小いんぎんなるあいしらひ、是皆へつらひ  
こばむといつつぶし、たとへは、奮あたらしけれ共、のぼつて立ゑぼし・折ゑぼしと也たるためしもなく、かんむり古たりといへ  
ども、くだつて草履・あしだと成たる事もなし、いかに／＼といふ  
それがし答へて曰、其方しらすや、龍志いづくんぞしらん蛟と她といへる古語を、此心は、上天をかくる龍と云るものは、大かた  
其かたち、へび・むかでの類ににたりといへども、心ざしは隔別にて、仁儀をまもり、其徳大にして、いくわうあり、いかにかた  
ちこそ同じやうなり共、へび・むかでのぶんとして、天龍の心ざしをわきまへしるべけんや、汝は是へび・むかで、我はこれ天龍  
の蟄居するがごとし、実ミ老驥癭に伏て心ざし千里といへり、いはんやわかきこの身をや、又其方よく聞べし、我まづがつさうあ  
たまにやつし、奉公をやめ隠居せり、然るに今、刀・わきざしをさしはり無用の俗氣、これ其時をしらず、其形をわきまへ知たるに  
あらず、髪をゆい刀・わきざしをさしたるがさふらひならば、今時の地下人・職人・商人、みなさふらひ道吟味の侍たるべきか、  
呼今此身上において、いづれのでき・かたきか有て、銚をよこたへ劔をわきはさまんや、誠なるかな、孟子にいへる仁者にてきな  
しと、周易にいへる時の一字、毛詩にいへる思無邪の三字、さりながら、刀・わきざしのまさに用あらんときは、我つねにときみ  
がき、ねたばをあはせ秘蔵しもちたる一腰の劔あり、吹毛の劔となづけ、せつなが間も身をはなさず、この劔は是唐にてはばくや  
がうちたる雌雄の劔、我朝にては三條の小鍛治宗近がうちたる獅子あざ丸に、猶勝れり、おつとり出して首尾にあはせん事、何の

不足やあらん、さあらば、なんぞ侍道をはめつせんや

又屋どののいしゆにへつらひこばむよしを云り、まつよく分別し心みよ、われふくうの身として、すりきり窄人となり、よき近付・親類とてもあらばや、げい能・才智ある身にもあらず、しかれば出世をかねたる我等にもなし、誠にかちをたへたる沖津舟の、よるべさためぬうき身なるを、今此宿のあるじ、釘やの豊田喜右衛門ならびに老母、又釘やの近藤五良左衛門、諸共に慈悲の心ざしふかく、義理の気ざしあつく、礼をこのみておごらず、しかるを以我をもあはれみ、高代のみせだなをかし、妻子共にやういくせられ、朝暮心躰をやすんじ侍る、されば玄冬そせつの寒き夜は、小袖をあたへてはだへをあたゝめさせ、九夏三伏のあつき日は、かたびらをえさせてはたへをすゞしめさせ、我母の老たるをいたはりあはれみ、もてなしあがめ、みづからちやのこをとゝのへ、茶をふつてちさうす、かるがゆへにや、母・さいし、病なくうれへをたち、枯野の雪のきえ残る露のいのちをたもちぬ、呼此やとあるし三人の心ざし、あふけは天よりもたかく、うつむけは地よりもあつし、そも当世の町人共をみるに、いやしきものなれども、時にあひ富貴のものを、よき人と思ひてあがめうやまひ、衣服掣束をたつとむ、いかほどたつとき人成共、世におちぶれすりきりの人をは、わるき人と思ひていやしみかてず、金銀ざいほうをたつとむ世間なるに、千々に引かへ万々にこえたるやどのあるし心ばせ、とやいはんかくやかたらん、まことに千人にすぐれるを英といひ、万人にこえたるを雄と云、しからは此釘やのあるじをさして町人の英雄といはん、ふかく感じあつくぎんして、一寸の胸中には是をはかりみるに、実もくく此人の祖孫、世々侍としてれきく也、されはこそ同気相求也、宜なるかな、金玉土にうづめども朽せず、白居易はずや、遺文三十、軸々金玉の声有、龍門原上の土にほねはうづんで名はうつまず

しかりしよりこのかた、此厚恩を心肺に銘じ、発露涕泣してゆひを折てかそへんとすれば、恒河の真砂よりもこまやかに、筆をとつて書せんとすれば、すゝりの水には大海もくむひかたとなるべし、此厚恩を報ぜんと、我かならず生死に流転の心ざし有、つたへきく釈尊のいにしへ、鬻兒のかいこをもつて巨海をはかり給ふ、ある書に曰、じひあるをもつて親とし、恩賞あるをもつて主とせよと、さあらば、なさけをかけぐみある人においては、しんるい・他人にへだてなく、父母の思ひをなし、物をとらせあいあ

る人においては、たつときいやしきをわかず、主君の礼をせずんば、かなふまじ、されは、天のあたふるをとらざれば、却而其罪をうる、時いたつておこなはざれば、かへつて其わざはひありと云り、しからば何ぞへつらひこぼむといはん、たゞし其礼大過するや、我聞過は不及にしかじ、といへども義によるべし、汝我あやまりをとくことや、まことにはかりしらず、せい多い海をうめんとす (巻四ノ一〇)

右の文がすべて彼自身の身の上を物語つているものとせば、なるほど彼は窄人ではあったが、蟄居せる天龍であり、まだまだ若い、檻に伏す若驥にして、志はまこと千里にあつたと、好意的にみることもできよう。そしてまたじつ

▲むかしさる人の云るは、小隠はりくさうにかくれ、大隠は朝市にまはるといふ、古きことばあり、この心は、小隠とは、さかしき世をのがれさりて、おく山ふかくすみなれ、世のうき事みじきかじと、かくれおる人也、大隠とは、朝市にまはるといへども、一点のうれへかなしみもなく、悪人になれむつびてもげがされず、かへつて其悪をしりぞけ、善をすむる人也、朝市と云は、武州江戸などのごとくに、にぎはしき国所の事也、されば、心だにまことの道にかなひなはと申事の候へば、我身よくおさまり、わか心だによくあきらかにして、心身無為無事ならば、万事千端安楽なるべし…… (巻三ノ九)

とある如く、いにしへの唐の賢者達の隠居せるにも比すべき日々、江戸という朝市に交わる大隠としての毎日を送っていたのかもしれない。が、しかし、彼がいくら身がまえようとも、自分の境遇を美化し悲壯ぶろうとも、所詮彼は窄人であった。いくら大言壮語し、いかほど衛おうとも、そこには何かしら虚しさがあった。……彼は窄人であった。そして隠士であったのである。

らう人の出入法度といへる人あり。是は何心に候はんや。つみあらはつみにこそおこなはれぬ。つみなき人ならば、いかゝしたる心ねにて出入をさらはれ候そ。らう人は人にては候はずや。侍の侍をたのむはあるへき事なり。えこそ心得られぬ。きたなき心ねにてもや候はん。 (清水物語 上)<sup>22</sup>

いとあはれなるは窄人なるへし。町人にはかねを下され。米をかし下され。にぎはひてうら山しき事のみおほからん。窄人には宿もかさねは。うへかつゆる人もありときく。 (同 下向)

これをうけてか、如偏子も実感をこめて言う。

むかしさる人の云るは、世に物うきものは宰人となれる侍成べし、されば聖主・賢君と万民あふぎたつとみ申其御代にさへ、御じひのうるほひは松葉の露ほそくもおよばず、けつく世間の米穀萬高直になりもて行て、飢かつへにおよぶふびんさよと、いたはりければ、傍なる人さし出ていひけるは、いや／＼、聖主・賢代の御じひはあまねしとこそおほゆれ、其いはれは、諸宰人、雨にかみをあらはず風にもどりをけづらず

一とせ宰人ばらひと云御法度ありて、国と所と、町／＼小路／＼、村／＼里／＼までをも、きびしくふれまはりて、一夜の宿をさへかさず、さあれば諸宰人、ゆかりをたゞし知音をたよりに立よらんとすれども、主人よりの法度におそるゝか身を引か、日比のよしみを忘れて事とふ人もなし、侍が侍を頼むは是常の事、時節相応の諸人の心中・行義、是非におよばず、さあれば老たるおや、いとけなき子、なやめるつま、みくるしきにもつをかたにかけ、こなたかなたとうかれまどひて、門にたゝすみ戸にさまよひ、天にあふぎてなげきかなしみ、地にふしてなきさげふ、あはれなるかないたましきかな、其にせ／＼相応にめしおかれぬさへあるべき事ならぬに、かくまでは宰人をにくみそねまれ給ふぞや、たゞし宰人の主君の、いにしへ不忠不功の逆心あるによつて、かくはにくませ給ふか、さあらば其不忠不功の逆心ある人につかはれし宰人にこそ、いかりもうつるべけれ、何そあまねくの宰人うれへかなしみ、わきまへがたし、古き詞に、いかりは水中の蟹にもうつり、愛は屋上の鳥にもおよぶと云る事、是隔別の事なるべし、  
がんくはいいかりをうつさずとあるをや (巻五ノ八二)

意林庵朝山素心をして「らう人は人にては候はすや。」と叫ばしめたその宰人。

○人にあなつらるゝ物……らうにん (古活字版・犬枕并狂哥)<sup>23</sup>

……あるひはよき侍の宰人して流浪すれば、むかしのつるぎ今の菜刀といはれ、家居見ぐるしく、鞆鳴して身上うすく、鑑つまり刃金もむねにまはりて、分別つたなく、人のもとに行ても、長刀あしらひの鍔とめにせられ、せめては身上の有つきをたのまんとて、猿のもみ手してお鬚の塵をとり、犬つくばひにて機嫌をうかどひ、猫せなかなりて仰せをうけたまはり、鼠まひをして御



左右をまてども、埒はあかずして牛の涎の永くしく、後には馬のおもつら鼻にかけられ、恥を忍び無心をこらへぬれば、只畜生同前に思ひあなづらるゝこそ、かなしけれ、古き哥に

狛人は字さへあさまし穴冠牛か午かと人にいわれて、と云哥有 (可笑記評判 卷第六・第十七 愚人は富貴に才覚人のすり切事)  
狛人は字さへうたてや穴冠牛か午かと人のあらそふ (世話用文章・中)<sup>24</sup>

主家を去り封禄を失ったというこのために、かくまでも侮られうとまれて、「あな、うし」と嘆きつゝも、その日その日の口過を求めてかせがねばならぬ狛人者。彼如偏子はそれであった。

偏力回切 相敗也 (寛永廿一年版・大広益会玉篇 卷第三・人部二十三)

偏魯狠切 テクバツ ヤブル クルシム キハマル (元禄十七年版・四声伊呂波韻大成 卷下 天・仄声)

しかも前に引いた卷五ノ八八に「生国あづま者なれば……結句の花ぬりにぶ男さたのかぎりにして」云々と、みづから述懐する如偏子。それが

上に天下国家・王公大夫の世をとりおさむる道をしめし、下には村里茅屋・田夫野叟の身をたておこなふ理をあらはす、その中に、たれとはなしに大名かう家・家老出頭侍までも筆にまかせて叱り恥しめ、天下国家の貴賤上下、この書の作者の心にかなはぬとて、いきどをり思…… (可笑記評判 卷第一・〔序〕)

とその心情を吐露しても、そのやるかたなき憤懣をぶつけてみても、所詮それは「テク」の広言にすぎず、「敗れ疲れ」失敗し落ちぶれた者の虚勢であり、つまるところ、かつての栄光の日々への郷愁にも似たものとなってしまふのである。言うなれば

ヤア何ンといはるゝ。よい評定かと思へば。浪人のやせ顔はり。……ア、それは無分別 (仮名手本忠臣蔵・第四)

身は雲水の便りなき、浪人ひがみとぞおぼえける。 (風俗文選 卷之一・瓢ノ辞 許六)

といった「浪人のやせ顔はり」・「浪人ひがみ」の如き感情を、そこにくみとることができるのである。「可笑記」なる書名にこもっているある種の強い熱気・悲憤のわだかまりとは、一つには彼が狛人者であったことに帰因していると見ても、決して誤りではないであ

ろ。窄人なりしためか、はたまた隠士なりしためか、あるいは生来生得のものか、彼の境遇のなせるわざか、彼がある種のすね者・ひがみ者の範疇に入れらるべき者であったことは、否めまい。それからあらぬか、前にも述べた如く、「可笑記」という題号は、おなじ笑わるべきものであっても、「太笑記」の如き気楽なものではなかった。それはまた

一家不如意にして、一瀬や二瀬三瀬四瀬七瀬、渡り兼たる瘦商人の、他のあざけりも任他とおもふ心から、是を可笑記跡追と名付て、銀もたぬ身か子孫にゆつるこそ、おかしけれ

という「可笑記跡追」の序とも違つたし、同じ窄人経験者でも

つれ／＼のおりふし、硯をならし筆をぞめ此草案をつゞれり、もとより愚癡短かなれば、文理不通にして、世のあざけりのがれがたし、しかはあれども、こゝろざしの及ふ処、万が一もよき事ありて、後の小人とりて身の悪を見るたよにもなれかしと、身の鏡と名付る物ならし、一笑／＼

という万治二己年初春 芳野屋開板の「身の鏡」とも異なるものであった。ともあれ、「笑わば笑え」という自信と、世に容れられず徒らに櫪に伏している自己へのいらだちと卑下とを示すこの書名の「下、

▲むかしさる人の云るは、萬のさうし・物語をみるに、同じ様なるしなく、幾所にもかきのせたり、作者の心おろかにして心はたらかず、小知におぼゆ、まことに詞多ければしなすくなしとあるをや、去ながら物の用にも立ぬべくすぐれたる事は、いく所にもかきのせてくるしかるまじきにや、其いはれは、細めなれ口づき候へば、寛やすくがてんもゆくべき物かも (巻五ノ八七)と弁解しつゝも、繰返し、彼はその苦しい心情を吐露して行くのである。

(続)

註1 鈴木勝忠氏の「雑俳語辞典」により検索。但し同書には出典が元禄七年の江戸不角点前句付集「へらず口」となっているが、この句の収載されている「へらず口」下巻は原本未詳の由で(未刊雑俳資料・二十七期4 鈴木氏解説)あるので、「へらず口」の全てが再刻されているという元禄十年の「江戸みやげ」(徳川文芸類聚・第十一所収)によつた。

2 B本では振り仮名「おかしき」の「お」字が「が」の如く見え、C本・D本には当該個所に振り仮名が施されていない。

- 3 「江戸書林出版書籍目録集成」(斯道文庫編)による。
- 4 松田修氏「変身」(国語国文 昭和二十八年四月)
- 5 「慶長拾五年長月の始つた、すゝろに九国のすゑまでおもむき侍らんと、駿河の国志豆機山の麓より出て、ゆく／＼まりこ川を渡に……」という書出しにはじまる紀行。写本 大本一冊。尊経閣文庫蔵。
- 6 「可笑記評判」では巻第十・第四十五「隠居して志を遂る事」と題がある。
- 7 同右 巻第七・第十「ある人此書の作者に異見の事」。
- 8 やゝ煩瑣なれど、以下、諸本の異同を若干あげてみる。(C・D・評は各々C本・D本・可笑記評判をあらわす。)
  - 9 さる時こつぜんと来りて——C・D・評 忽然として来て。
  - 対し——C・D・評 ナシ。
  - 10 いかにとして——C・D・評 いかにして
  - みにくム——C・D・評 見くるしく
  - 11 あのやうなる——C・D・評 あの
  - 12 腹立らんは——C・D・評 腹たてば。
  - 13 存——C・D・評 ナシ。
  - 14 覚て候——C・D・評 覚え候
  - 15 くさム——評 くさムを
  - 16 いつつべし——評 いひつべし
  - 17 のぼつて——評 のぼりて
  - 18 くだつて——C・D・評 ナシ。
  - 19 草履——評 草履
  - 20 事も——C・D・評 事
  - 21

以上諸本間の異同を少しくあげて見たが、この事実からもD本(万治版)および可笑記評判が、C本すなわち無刊記十二行本

をもとにしていることがわかるであろう。

22 寛永拾五成十月吉日刊。大本 二卷二冊。慶応義塾図書館本（赤木文庫旧蔵。元表紙原題簽つき。）には、下巻後表紙見返しに「洛陽四条坊門 敦賀屋久兵衛」の押板がある。この「清水物語」と「可笑記」の関係については、後述する。

23 この項は他の三写本の「大枕」にも同様に存する。

24 艸田子編。三卷。元禄五年七月 洛陽 貞節軒佐野彦三郎刊。他に同年記を有する烏丸通七観音町 貞節軒佐野九兵衛板、宝永六年正月板などがある。上・中巻が「世話用文章」で、下巻が「世話字節用集」。艸田子は艸田子寸木、すなわち苗村丈伯のこと。元禄五年五月刊の「女重宝記」等の編者でもある。

25 大本 三卷三冊。著者「日州之住無名之野人」こと江島為信については、松田修氏「日州漂泊野人の生涯」（国語国文 昭和二十七年七月 後に「日本近世文学の成立」に収載）に詳しい。（昭四三・九・二六）

## 追記

最近（昭和四十三年十二月）、深沢秋男氏が、その御勞作「可笑記の諸本について」を、「文学研究」第二十八号に発表された。全国各地の諸本は勿論、海外在のものまでも、精査されておられる。

（昭四四・一・一六）